

全盲のピアニスト辻井君

シヨパン国際ピアノコンクールに出場

気になっていた辻井君のCDをシヨップで

以前に連載していた「僕の講義ノート」で、全盲のピアニスト辻井伸行君を紹介したことがあります（「僕の講義ノート」⑦）
人の可能性について（二〇〇二年一月〇月号）。
当時辻井君は小学校六年生でした。その後、辻井君

がどうしているか気になっていましたが、昨年の十一月、たまま主人がCDシヨップ

店で辻井君のアルバムが目にとまりました。指揮者は佐渡裕（ゆたか）氏、ベルリン・ドイツ交響楽団と協演した「ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第二番」を買いました。佐渡氏によると、録音が終わった瞬間、オーケストラのメンバーから拍手



辻井君のアルバム

手と「ブラボー！」の声が起り、「スタジオは幸福感で一杯になった」。家族で聴きましたが「ピアノのやわらかい音が気持ちよい」（娘の感想）。このむつかしい曲をオーケストラをバックによくぞ感動的に演奏したと思いました。

辻井伸行君がプロのピアニストになるまで

伸行君のプロへのチャレンジについては、お母さんの書いた「のぶカンタービレ！」全盲で生まれた息子・伸行がプロのピアニストになるまで」（辻井いつ子）



で紹介されています（二〇〇八年十一月にアスコムから出版）。
伸行君は盲学校を卒業後、ピアノの練習をつけ、高校生の十七歳のときにポランドのワルシャワで開催された第十五回（二〇〇五年）シヨパン国際ピアノコンクールに出場。セミファイナルまで残る良い成績だったということ。シヨパン国際ピアノコンクールは五年ごとに開催され、出場者の年齢は十七歳から二十八歳までに限られています。予備予選では、世界中から集まった三五〇人が八〇人に絞られ、さらに一次予選で八〇人が三二人に絞られました。伸行君の演奏が終ると客席は総立ちになり、拍手が鳴りやまず二度も舞台上に呼び戻されたとのこと。残念ながら二次予選には残れなかったものの、シヨパン協会から栄誉ある「ポランド批評家賞」を受賞。人気のある演奏だけCD化されることになり、伸行君の演奏もその中に納め

られたということ。シヨパンコンクールへの出場の際機について、お母さんの辻井いつ子さんは「当初、私たちに大きな戸惑いがあったことは事実でした。それでも、私たちが前へと歩みを進めた最大の理由は、伸行のやりたいという意志でした。入賞を狙うとかファイナリストになりたいというよりも、本人がこの時期にシヨパンを弾きたがっている。その最高の舞台はフィルハーモニー・ホールであることは間違いない。ならば出場しよう。勝ち負けではなく、この時期にしっかりとシヨパンと向き合おう。私たち親子は、そう覚悟を決めたのです。（本文より）」と書いています。
今後がますます楽しいなプロ・ピアニスト
伸行君は現在、音楽大学である上野学園大学に在籍し、プロのピアニストとして活動しています。今後がますます楽しみです。
（もり としあき）

続
サイエンティストの月 13

森 利明
(もり としあき)

大阪府立大学 先端科学
イノベーションセンター